

『書史会要』八思巴字母表 一音注惡と梵文 visarga—

吉池孝一

1. はじめに

図は明初の陶宗儀著『書史会要』(1376年)に掲載されたパスパ文字の一覧表である。ここには“字之母四十一”すなわち“字之母”とあるのみで、“字母”と明示しているわけではないが、所謂アルファベット式の字母の一覧表という意味で“字母表”と称することにする<sup>1</sup>。

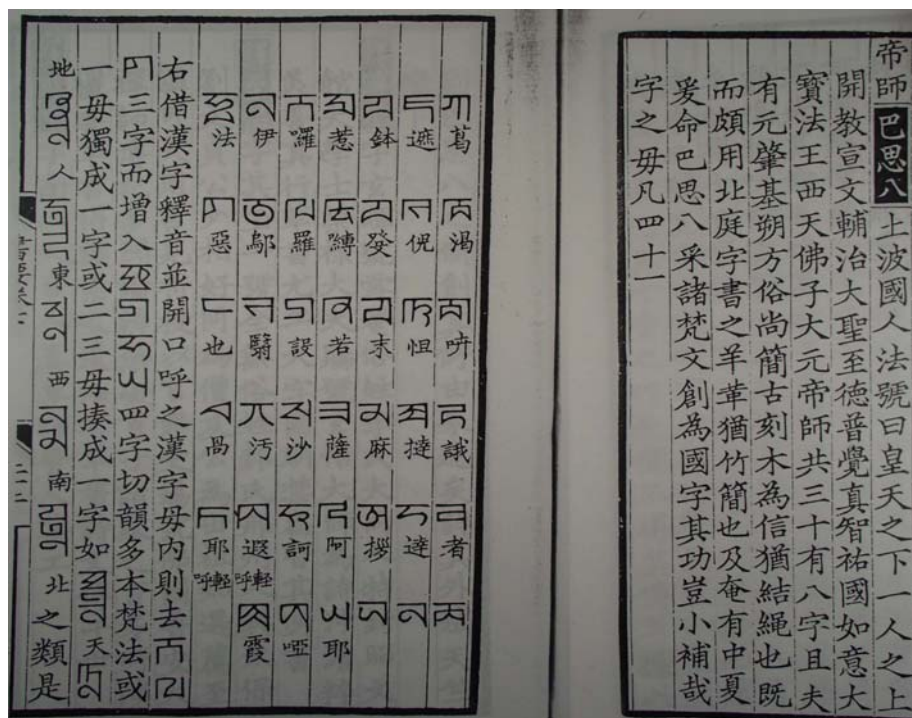


図1

さて、この字母表(図1)をみると、漢字に拠る音注が付されている。この音注については、Nakano1971(pp. 39-40)において、宋・惟浄『景祐天竺字源』の対音システムを踏襲して

<sup>1</sup> “字”とは何か“母”とは何か“字母”とは何かという問題がある。慶谷 1981によると、“「字母」という語は、漢譯佛典に六世紀はじめにあらわれ、母音、子音をあわせ呼んだものであったが、悉曇學の翻字では子音部分が中心としてとりあつかわれるため、子音は「體文」(主體となる文字、本體の文字)、そして「字母」(文字を生みだすもと、文字の母體)と呼ばれるようになり、三十六字母(あるいは三十字母)というその延長線上の用法に至って、「字母」はもっぱら聲母のこととして用いられるようになった。悉曇學の「字母」から中國音韻學の「字母」に至るまでには、おそらくまだ迂餘曲折があつて、また別個の問題として考察するに價いする”(210頁)とあるように、字母という名称をめぐるは、さまざまな問題があり、ここでも、述べなければならないことはあるが、それは他日を期すとして、とりあえず“字母表”と称して先にすすむことにする。

いるとの指摘がなされている。たしかに、『書史会要』巻八“天竺”には“天竺字源”に拠るといふ梵字字母表があり、パスパ字字母表とほぼ同様の漢字音注が施されている。なお、この巻八“天竺”の梵字は、居庸関過街塔内壁碑文と同様の文字すなわちランチャ(Lantsha)文字<sup>2</sup>となっている。以上、書史会要のパスパ字字母表を簡単に確認した。これより、この字母表につき気の付いた点を記す。なお、パスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字する<sup>3</sup>。

## 2. 音注“惡”が付された文字

『書史会要』のパスパ字字母表を見ると漢語を記す文字以外に蒙古語を表記する**𐰆** q や **𐰇** r がある。照那斯圖氏はこの 41 字母の表を、様々な言語を表記するため初期に作られた原字母表であろうとする<sup>4</sup>。原字母表そのものであるかどうか、確かに述べることはできないのであろうが、原字母表の様子をよく伝えるものと見て大過はないであろう<sup>5</sup>。問題は左端の“**𐰆** 惡”である。管見によるかぎり、**𐰆**を用いた実例は今のところ発見されていないようであり、どのような音を意図したものか実証することは困難である。

この文字につき、照那斯圖 1984(pp. 381-382)は、恐らくは子音であろうが不詳であるとし、今後の研究を待つという姿勢である。呼格吉勒圖・薩如拉 2004(p. 10)は**𐰆**を“q”で、**𐰇**を“q1”で翻字する。吉田・チメドルジ 2008(p. 16)は“g”と翻字する。このように後二者は一覧表を提示し翻字を与えている。翻字とはいえ何らかの音声的な背景を持つはずであるから、その根拠を知りたいのであるが提示されているのは表のみであり、それを窺い知ることにはできない。あるいは**𐰆**との字形の類似を根拠とするのであろうかと想像するくらいである。

さて、字形という点、最近興味深い資料が公刊された。内蒙古自治区の黒城(ハラホト)よりこの字母表と同系統の字母表の断片が出土しており最近になって写真が公刊され、字形を容易に確認することができるようになった(図2参照)<sup>6</sup>。

<sup>2</sup> 長尾雅人 1957 の 137 頁によると、所謂ランチャ文字はネパールの梵字であるといわれ、チベットにおいては現在もなお好んで用いられる装飾字体であるという。

<sup>3</sup> 〈子音〉**𐰆** g **𐰇** k' **𐰈** k **𐰉** ɠ **𐰊** d **𐰋** t' **𐰌** t **𐰍** n **𐰎** l **𐰏** b **𐰐** p' **𐰑** p **𐰒** m **𐰓** f ( **𐰔** f1 奉母 **𐰕** f2 非敷母。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様) **𐰖** v **𐰗** j **𐰘** č' **𐰙** č **𐰚** ŋ **𐰛** š ( **𐰜** š1 禪母 **𐰝** š2 審母) **𐰞** ž **𐰟** j **𐰠** c' **𐰡** c **𐰢** s **𐰣** z **𐰤** h ( **𐰥** h1 匣母 **𐰦** h2 曉母) **𐰧** γ **𐰨** y ( **𐰩** y1 喻母 **𐰪** y2 幺(影)母) **𐰫** r **𐰬** q (半母音) **𐰭** ü **𐰮** i (母音) **𐰯** u **𐰰** i **𐰱** é **𐰲** e **𐰳** o とし、母音 a は( ) を付して補写する。

<sup>4</sup> 照那斯圖 1980 の 39 頁では“原始字母表”と称し、照那斯圖 1984 の 380 頁では“原字母表”と称する。

<sup>5</sup> 中村 2008 は、次に紹介する黒城(ハラホト)出土の字母表のような左から右への横書きの配列となったチベット文字式の“基本字母表”(原字母表に相当)の存在を想定し、それより各種の字母表ができたとする。即ち『書史会要』のパスパ字字母表は“基本字母表”の字母順を変えずに漢文式の配列(右から左への縦書き)にしたものであり、『蒙古字韻』の字母表はもとの配列順(左から右への横書き)を変えずに三十六字母の字母順にしたものであるという。卓見である。

<sup>6</sup> 吉田・チメドルジ 2008 の 339 頁参照。

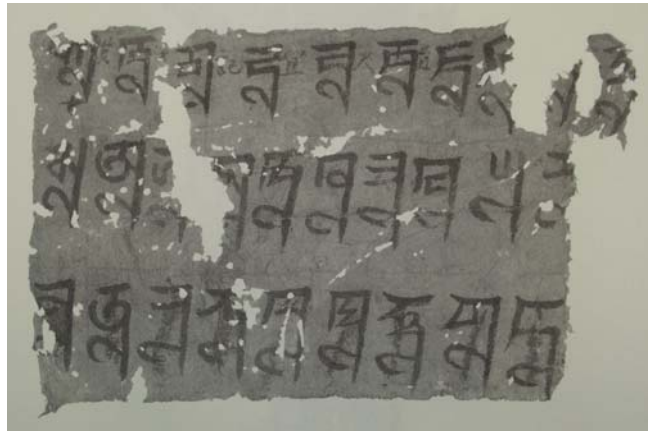


図 2

これによると字形は𑖇(下段右から 2 字目)である。𑖇と𑖇のどちらが正規の字形であるか判断は難しいところであるが、この文字は『蒙古字韻』の篆字母表の末尾にも誤って掲載されており<sup>7</sup>、それによると𑖇(篆字は𑖇)であるから、用例数および篆字の字形から判断して、今のところは黒城出土のパスパ字母表の𑖇(𑖇)に類する字形に軍配を挙げておくべきなのであろう。そうであるならば、字形からみて、これはチベット文字で g と翻字されるものに拠って作られた文字とみて大過ないのであろう。もっとも、チベット文字の g を変形して作ったパスパ文字には既に有声閉鎖音が想定される𑖇g があるわけであるから、他の喉音を考えなければならない。

さて、先に述べたようにこのパスパ文字には“惡”という音注が付されている。この音注は梵字のヴィサルガ(visarga)すなわち ah の h に付されるものと同様である<sup>8</sup>。そこで、『書史会要』卷八“天竺”(第六葉右)の梵字字母表を確認すると visarga の ah には“惡 緊”と音注が付されている。この音の現代に伝承されたものについては、菅沼 1980 に次のようにあり参考となる。

h はもともと有声音で、h がふつうの気音である。ha はハと仮名表記できる。h はヴィサルガ(visarga)といい、サンスクリットの単語のなかでは、ふつう母音の後にあらわれ、前の母音をともなった形で発音される。たとえば buddhah は、ブッダハというふうに発音される。(19-20 頁)

この記述よりみて、『書史会要』卷八“天竺”の音注“惡 緊”の小字“緊”は、母音の後の気音を発する時に自覚する喉頭の感触を象徴したものとして大過はないであろう。

<sup>7</sup> 吉池 2009 参照。

<sup>8</sup> 慶谷 1981 によると、“漢譯佛典では、文字のことをとりあつかったもの(字門説)が二十あまり知られている。それらは二系統に分かれ、その一つは四十二字門ないしその變種、もう一つは五十字門ないしはその變種である”(200 頁)とあり文字の配列順が記されている。それによると visarga が挙げられるのは五十字門系統のものである。この系統の歴代の字母表の幾つかは簡便には羅常培 1932 に付された“四十九根本字諸經譯文異同表”で確認することができる。歴代の 16 種中、7 種において“惡”もしくは“噯”で visarga を表記する。もっとも、短い a を“惡”“噯”で表記する字母表は各 1 ある。

### 3. おわりに

以上によると、パスパ字字母表の音注“惡”は、梵字字母表の音注“惡 緊”と関連があるようにみえ、𑖀(𑖁)も、あるいは梵語の *h* のような音のために用意された文字かもしれないと思えてくる。そうであるならば、居庸関過街塔の内壁にはパスパ文字で梵語も刻されているのだが、その碑文に𑖀(𑖁)が使用されていても良さそうなものである。しかしながら、この文字の使用例はなく、ヴィサルガ(visarga)の個所は無表記となっている<sup>9</sup>。“当初作られたものが、その後使用されなかつただけだ”と強弁することも不可能ではないが、これはヴィサルガ(visarga)説にとっては不利である。結局のところ、この𑖀(𑖁)が何を意図したものか判然としないのであるが、他に妙案は持ち合わせておらず、当面の間はヴィサルガ(visarga)説によることとして、𑖀(𑖁)は *h* で翻字する。

もっとも、梵語のヴィサルガ(visarga)との関係などは既にどなたかが指摘しておられるかもしれないが寡聞にして知らない。

#### 参考文献〈発行年順〉

- 羅常培1932. 「梵文顎音五母の藏漢對音研究」, 『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三本第二分。『羅常培語言學論文選集』(北京: 中華書局, 1963年)。『羅常培語言學論文集』(北京: 商務印書館, 2004年)に集録されている。
- 長尾雅人1957. 「1. ランチャ大字刻文」, 『居庸關』村田治郎編著、京都大學工學部、137-142頁。
- 西田龍雄1957. 「3. パクパ大字刻文」, 『居庸關』村田治郎編著、京都大學工學部、148-160頁。
- M. Nakano 1971. *A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yün*. Canberra: The Australian National University Press.
- 照那斯圖1980. 「論八思巴字」, 『民族語文』1980年第1期, 37-43頁。
- 菅沼晃1980. 『サンスクリットの基礎と実践』東京: 平河出版社。第3刷1984による。
- 慶谷壽信1981. 「「字母」という名稱をめぐって」, 『日本中國學會報』第三十三集, 200-213頁。
- 照那斯圖1984. 「八思巴字研究」, 『中国民族古文字研究』北京: 中国社会科学出版社, 374-392頁。
- 呼格吉勒圖・薩如拉2004. 『八思巴字蒙古語文獻匯編』内蒙古: 内蒙古教育出版社。
- 吉田順一・チメドルジ2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』東京: 雄山閣。
- 中村雅之2008. 「パスパ文字の字母表について」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第73号, 1-3頁。
- 吉池孝一2009. 「蒙古字韻の篆字母表について」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第82号, 13-18頁。

---

<sup>9</sup> 西田龍雄 1957 の 148-160 頁を参照。